



Japan Society of Civil Engineers
International Activities Center

国際センター通信 (No.15)

土木学会と世界

土木学会は広義において、本邦並びに世界の造形物であれ自然物であれ、殆ど全てに関係する土木産業の発展に貢献するものである。さらには、優秀な本邦土木技術を、国外へ輸出・技術移転することにも貢献している。本邦土木技術者は自身の優秀性を強く信じ、世界で活躍してきた。しかしながら最近に至って、かつて本邦建設産業にとり格好の市場であった各国に、汎用性が有る技術は既に移転が進んでいる。汎用性がある消費材は世界市場において、価格破壊の対象となる。この様な世界市場の現状に直面して、本邦建設産業はかつての発展途上国あるいは新興国とされる国々からの競合業者と、苦しい戦いを強いられている。

大きな原則として、世界の市場に於ける競争性の確立は、優位技術による他は無い。発展途上国あるいは新興国からの競合者が追いつく前に、更なる優位性を探求し、確立し続ける。技術の内容も、広範に拡大させる。例えば、単なる設計・施工・管理による新設から、工期短縮技術、品質向上技術、業者間のコラボ技術、あるいは、民間企業経営技術の活用など、あらゆる智恵を図らなければならない。これらに加えて、本邦建設産業が辿って来た過程も、大きな競争力に替えることができる。すなわち、わが国は戦後復興、高度経済成長、現在に至る間に、施設の大量提供、大型化、複合化、無人化や、様々な新しい技術・材料・複合・機材・ICT化、などを産出してきた。そして、経済の活性化に伴う環境問題への取り組みにも大きな成功を修めると共に、これら施設の運用・管理・補修・更新技術にも大きく先行している。

さらに、大きな視点として、他の国がまねできない特徴を、我々が保有している事実であろう。それは、先の東京オリンピックの誘致においても最前面で活用されたが、生まれながらに保有し、自然に行動している「おもてなし」であり、「細部へのこだわり」、「融和された社会」、「安全・安心」、「時刻の正確性」など、多くの訪問外国人が日本を高く評価する原点である。これらの特徴を強く企業活動にも押し出すことこそが、何よりも勝る競争であろう。



株式会社オリエタルコンサルタンツ
代表取締役会長
土木学会フェロー会員
廣谷 彰彦

日越交流 40 周年記念シンポジウム開催報告

土木学会(JSCE)はベトナム土木協会(VFCEA)およびハノイ建設大学(NUCE)との共催で、地下構造物建設・地下輸送・地盤工学を対象としたシンポジウムを開催し、成功裏に幕を閉じました。本年は 1973 年から数えて日越国交 40 周年を記念する年にあたり、様々な記念行事が企画・実施されています。本シンポジウムもその公式行事の一環として企画・実施されたものです。



国際交流 Gr.
ベトナムグループリーダー
Phan Huu Duy Quoc

国際センターベトナム Gr. は年初よりベトナム土木協会およびハノイ建設大学の担当者らと協力し、準備作業を継続してきました。またベトナム現地における組織委員会はベトナム土木協会の国際活動委員長であり、ベトナム地盤工学会の会長でもある Nguyen Truong Tien 教授の主導のもと運営が行われました。

本シンポジウムは日越両国の土木技術者に対して、①共通課題に対する情報交換、②専門家ネットワークの構築、③両国の長年に渡る友好関係の再確認を行う機会を提供することを目的として実施されました。



開会式の様子

首都ハノイ中心部のホーチミンミュージアムにて行われた 2 日間に渡るシンポジウムには、日本からの参加者約 60 名を含む総数約 300 名が出席しました。土木学会からは小野武彦前土木学会長を団長とする代表団が派遣されました。小野前会長は今年 6 月までの任期期間中、土木学会長として土木分野における日越間の協力関係の強化に尽力されていました。

招待講演者として土木学会から 4 名の方々が以下の題目で基調講演を行いました。

- ・メトロネットワークの発展（森地教授：政策研究大学大学院）
- ・地下空間の有効利用（松下教授：芝浦工業大学）
- ・都市インフラのためのシールド技術（金丸氏：清水建設）
- ・技術インフラのためのパイプジャッキング工法（安田氏：安田エンジニアリング）

基調講演および技術講演では、ベトナムと日本の建設分野における協力を焦点を当てつつ、ベトナム国内での地盤工学・地下施設建設・地下輸送などにおける最新の動向について非常に明確な説明がなされました。シンポジウム初日は 8 編の基調講演と 10 編の技術講演が日本、ベトナム両国の技術者により行われました。

シンポジウム二日目は技術講演に併せて、これからの土木学会とベトナム土木協会の協力関係について議論する特別セッションが行われました。特別セッションでは、協力関係を通じてベトナム、日本両国内での実際の建設活動におけるニーズに答える成果を生み出し、また技術者と研究者の直接的な交流の機会を創出することを目標とする合意がなされました。この目標に向けて、“地下空間の有効利用とその建設”、“大径間橋の建設とモニタリング”、“深礎と地盤改良”、“技術者教育と資格制度”といったテーマに対するワーキンググループ設置のために共同作業を実施することが併せて合意されています。また日本で土木技術を学んだ土木技術者がネットワークを通じて集まり、両国間の交流の懸け橋を担うという考えについても合意しました。

シンポジウムの最後には日本の ODA プロジェクトであり、またベトナム国内で進められているインフラ整備における日本とベトナムの協力関係の象徴とも言える Nhat Tan 橋建設現場の見学会が行われました。

本シンポジウムは日本の国土交通省、ベトナムの建設省(MOC)、国際協力機構(JICA)や在ベトナム日本大使館といった様々な政府機関、および交通運輸大学(UTC)やベトナム若手土木技術者会の多大な協力のもと実施されました。土木学会とベトナム土木協会は 2000 年に最初の協力協定を結び、2012 年にこの長期に渡る協力関係に対して新たな覚書を取り交わしています。土木学会は同じく 2012 年にベトナム橋梁道路協会(VIBRA)およびベトナム構造建設技術協会(VASECT)との協力覚書にも署名しています。

また、シンポジウムの前日には土木学会とハノイ建設大学の間で協力覚書への署名が行われ、同時に日越土木技術者協力促進センター(Center for promoting Vietnam - Japan Civil Engineers Collaboration)と呼ばれる新たな活動拠点が開設されています。このセンターは両国の土木技術者に対して日本の技術文書の提供する協力・交流の場として、会議の開催や協力活動の拠点となることが期待されています。



日越土木技術者協力促進センター
開設式典における覚書交換

今回のシンポジウムはベトナムと日本の、とりわけ土木工学における協力関係を再確認する場として、土木学会とベトナムにおける各専門家組織との協力関係がより強固な基盤を持った新たな段階に進展していることを確認することができたと考えています。

2013 年フィリピン土木学会(PICE)年次大会参加報告

2013 年 11 月 7 日から 9 日の間、フィリピン・ミンダナオ島ダバオ市において、土木学会（以下 JSCE）が協力協定を締結するフィリピン土木学会（以下 PICE）の第 39 回 National Convention が開催されました。JSCE からは、石井弓夫元会長を訪問団長とする合計 3 名が参加しました。

初日の開会式にて、PICE の Momo 会長による開会宣言なされ、大会テーマとなっている Jakarta Protocol（2013 年 8 月アジア土木学会連合協議会加盟学会が署名）が紹介されました。Momo 会長は開会挨拶の中で Civil Engineer が果たすべき役割について強く主張されていました。

午後は、Plenary として、PICE の 2013 年事業報告、表彰式、特別講演が行われました。特別講演では、PICE Research and Development Office の設置、倫理綱領 Code of Ethics に関する取り組みなどが紹介されました。



Momo 会長開会挨拶



石井元会長の話題提供

2日目には International Roundtable Discussion が行われました。テーマは”International Cooperation Among Civil Engineers on Disaster Risk Management”であり、石井元会長から東日本大震災を教訓とする災害対応について話題提供を行いました。PICE からは、災害発生時の早急な対応を行うため、EQRP(Earthquake Quick Response Program)を設けたことが紹介されました。

最終日の閉会式では、JSCE として挨拶の機会をいただき、石井元会長は PICE 大会への招待と国際ラウンドテーブルでの発表機会の提供に対する感謝の意を述べました。そして JSCE が来年創立 100 周年を迎え、国際会議や Asian Board Meeting などを開催することを紹介しました。そして石井元会長より、参考資料等とともに JSCE 橋本会長から PICE の Momo 会長宛の 100 周年記念国際会議への招待状が手渡されました。その後、技術講演、Momo 会長による優秀活動委員会などの表彰が行なわれ、閉会しました。

今回の PICE 年次大会期間中に台風 30 号がフィリピン中部を襲い、多数の犠牲者が出ました。大会開催地のダバオ市は幸いにも台風の影響はほとんどなく、無事にミッションを終えることができました。今後も JSCE は PICE との連携を活発にし、ひいてはアジアの防災力向上に貢献すべきであると強く感じました。

(国際センター事務局 記)

国際センターの活動 (土木学会会長 橋本 鋼太郎)

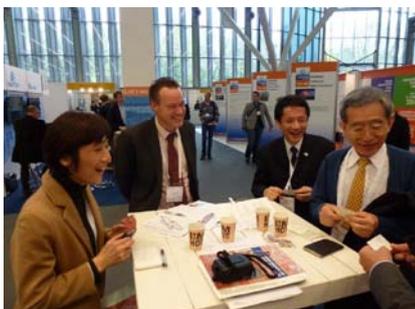
◆英国、オランダ歴訪記

11月3日から9日にかけて、土木学会 100 周年の記念行事への参加依頼をおもな目的に、イギリスとオランダを訪問しました。

まず4日に、国際センター英国担当の藤原教授と英国道路庁の和田氏とともに、英国土木学会 (ICE) の Barry Clarke 会長、Nick Baveystock 事務局長と面会しました。また、津村幹事長をはじめとする、英国分会の皆様と交流会を持ちました。ICE の訪問では、学会の 1818 年の設立以来、約 200 年の伝統を背景に、学会の会館と図書館の荘厳さが、土木の偉大さを物語っている印象を受けました。



クラーク会長から書籍を贈呈される橋本会長



オランダ館にて中央はピーク氏

翌5、6日は「IWW 国際ウォーター・ウィーク アムステルダム」に出席し、デルタ計画のリスク管理とマネジメントや欧州の都市下水のオーバーフロー対策に関するセッションなどに参加しました。IWW アムステルダムの展示会は、880 以上の企業・団体が出展し、約 21,000 名が参加した大規模なものでした。しかし、日系企業の参加は5社と少ない状況でした。

展示会場では、オランダ国土交通・環境省 Bob Oeloff 氏、デルタ委員会 Martien Beek 氏、外務省 Tom Kompier 氏と意見交換をおこないました。さらに、日本から会議に参加した古米教授、糸川氏とともに、オランダ大使館主催のデ・レイケシンポジウムの講演者である Frans van de Ven 教授と交流会を行いました。



橋本会長とヴィーリング名誉教授

7日にオランダ王立工学会（KIVI NIRIA）の土木担当理事 J.K. Vrijling 教授、Micaela dos Ramos 専務局長と面会しました。面会に先立ち、南ホランド州のデルタ地帯のハーリングヴリートダムとマエスラント可動堰の2か所を視察しました。

今回は、非常に限られた行程の中での訪問でしたが、土木学会の100周年記念行事への参加に理解をいただき、更にオランダデルタ事業の現場視察を行うなど、非常に有意義でありました。

イベント情報

お知らせ

- ◆ 土木学会誌の特集記事の概要を JSCE の website（英語版）にアップしました。
<http://www.jsce-int.org/pub/magazine>
- ◆ 土木学会コンクリート委員会 ニュースレター No. 35 が発行されました。
<http://www.jsce.or.jp/committee/concrete/e/newsletter/Newsletter.htm>

御協力をお願い

国際センターでは、国際活動に関する“情報発信の強化”を目標に掲げ「国際センター通信」を配信しておりますが、更に配信先を拡大し、皆さまと情報を共有していきたいと考えています。

つきましては、皆さまより周囲の方々へ国際センター通信をご紹介いただき、国際センター通信の定期的配信を希望される方には、次の登録フォームよりご登録いただくよう御案内いただけませんか。何卒、御協力のほどよろしくお願いいたします。

「国際センター通信配信希望者 登録フォーム」

- 日本語版：<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/31>
- 英語版：http://www.jsce-int.org/pub/registration/non-international_students
- 英語版（日本の大学等への留学経験をお持ちの方）：<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/30>

◆掲載記事募集します◆

国際センター通信では、会員の皆様から幅広く投稿記事を募集しています。国内外の産学官界に所属する技術者、研究者、行政官および学生等に配信すべきと考える記事を投稿してください。テーマはプロジェクト紹介、技術紹介、ご自身の体験談などです。

国際センター通信をより充実した、読み応えあるものにして行きたいと考えておりますので、ぜひ、ご協力くださいますようお願いいたします。

記事投稿の詳細はコチラ>>> (<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/47>)

Yの独り言

京都に、シンプルで簡潔で美しい一本橋という橋があります。白川にかかる約70cm幅の石の橋で、18世紀にかけられたものです。この橋は、比叡山の行者が千日回峰行で、市内に入る時に最初にわたる橋としても有名です。まるで鉛筆が川の上にかかっているかのようですが、きちんと役割を果たしています。この橋は、人々が川を渡り対岸へ行きたいという強い気持ちと、それを何とかしようとした努力の表れのように見えます。そしてまさにそれが、土木技術者たちが動く理由であり目的であると思います。川を渡るに、たくさん飾りのある橋が必要なのでしょうか？ まあ、京都に行く機会があれば、その橋を渡ってみてください。

【ご意見・ご質問】：JSCE IAC: iac-news@jsce.or.jp

本通信をより話題性に富んだ内容にするため、皆様のご意見やコメントをお聞かせください。

